



Title	中央ユーラシアのムスリム家族と女性：規範・言説研究の射程とロシア的文脈の検討
Author(s)	磯貝, 真澄
Citation	日本中央アジア学会報, 17, 38-39
Issue Date	2021-07-31
DOI	10.14943/jacas.17.38
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89139
Type	article
File Information	JB017_009isogai.pdf



[Instructions for use](#)

中央ユーラシアのムスリム家族と女性 —— 規範・言説研究の射程とロシア的文脈の検討 ——

磯貝 真澄

ロシア帝政末期のムスリム言論界——地域的には主に、ヴォルガ・ウラル地域、クリミア、カフカース、中央アジア——では、知識層によって家族や女性のあり方が問題と捉えられ、論じられたことが知られる。そこでは、規範を説いたり論じたりするタイプの言説、また男女同等論／平等論と理解され得るような主張が観察された。それらは従来、概してジャディード研究(または、それとほぼ重なる、啓蒙家=知識人の思想研究)の枠組みで分析されてきた。しかし、それらをより広い文脈に位置づける可能性を探ってみると、一例として、ロシア帝国の行政において支配的だった家族論、性別役割分業論、良妻賢母主義的女子教育論などと、ムスリム言論界で行われた同種の議論は多くの点で類似していたことに気づかされる。他方で、オスマン帝国やエジプトのような中東の論壇でも同種の議論が、同じ頃か、ロシアよりも若干早い時期に展開されていたこともわかる [磯貝 2014]。それらはいずれも全体としてよく似た内容を持つが、それぞれの主張の論理要素の組み合わせには違いも認められる。

また、従来の研究で、そうしたロシア帝政末期のムスリム言論界で語られた家族や女性にまつわる言説が、ソ連初期の中央アジア、特にウズベキスタンにおける行政主導の「女性解放」論に継承されたことも指摘されている [Kamp 2006]。ソ連中・後期やソ連解体後も視野に入れると、先行研究はロシア人を念頭に置くものではあるが、一例として性別役割分業が当然視され続けてきた歴史も見えてくる。とはいえ、特にソ連中・後期については、ムスリム文化を引き継ぐ諸民族を対象とする研究が極端に不足しているという問題がある。

上述のような研究状況や見通しに基づき、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点 2020年度共同研究「中央ユーラシアおよび中東ムスリムの家族・ジェンダーをめぐる規範——言説とネットワークの超域的展開——」、および東北大学東北アジア研究センター令和2年度共同研究「ロシア・ソ連の家族・ジェンダー規範とイスラームの言説の比較研究」は、次の課題を設けて研究を進めている。

- ロシア帝政末期のムスリム言論界で語られた家族や女性にまつわる言説について、論理の参照関係(参照文献情報で確定できるもの、および論理要素の比較や人的関係に基づき

推定できるもの)を解明する。その際、ロシア帝国行政との関係と、中東の論壇とのつながりの双方について基本的事実を明らかにする。

- ソ連期とソ連解体後については、歴史研究と現代研究の接続を念頭に、特にウズベキスタンを事例として、家族や女性をめぐる規範に関する基本的事実を解明する。あわせて、ウズベキスタンとエジプトなどの中東諸国を比較し、ソ連(社会主義的近代化)の経験から生じたと推測できる社会的特徴の有無にアプローチする。

本パネルセッション「中央ユーラシアの家族とジェンダー——規範・言説・ネットワーク——」は、これらの共同研究で組織したものである。

その中で本報告は特に、ロシア帝政末期のムスリム言論界で家族や女性が俎上に載るようになった、その初期の様相を明らかにする。第1に、そうした言論活動がムスリム社会の中で自立的に始められたものではなく、イスラーム宗務行政上の施策を契機としていたことを指摘する。そのテーマで公刊された最初期の書籍で広く読まれたものは、改革論者のウラマーで、オレンブルグ・ムスリム宗務協議会のカーディー(委員)だったリザエッディン・ブン・ファフレッディンによる、『教養ある母親』(カザン、1898年)や『教養ある妻』(カザン、1899年)である。リザエッディンの『教養ある母親』が刊行された1898年、宗務協議会では、ムフティー(議長)のムハンマディヤール・スルターノフが管轄下のイマームらに対して、家族や女性の道徳規範を内容とする訓示(1898年8月25日付)を發出していた。つまり、リザエッディンの著作は、ひとりの文筆家の作品として読まれたと考えられるものだが、まがいなく宗務協議会の施策を踏まえて刊行されたと言えるだろう。

第2に、ムスリム女性による最初期の言論活動が、改革論、特に新方式教育を支持するアブスタイ(ムスリム女性有識者、多くの場合、ウラマーの妻・娘)によって始められ、それが宗務協議会や男性知識人の支援を得たものだったことを指摘する。第3に、ロシア帝国の宗務行政に基づく統治機構におけるイスラーム宗務行政の位置を考えるならば、ムスリムによる家族や女性をめぐる議論は、中央行政で支配的だった家族・女性言説に連なるものとみてよい。そうしたムスリム言論界と行政とのつながりを指摘する一方で、本報告は、第4に、そうしたムスリムの言論活動が当初から、オスマン知識人の著作を参照したものだということも明らかにする。

参考文献

- Kamp, Marianne. 2006. *The New Woman in Uzbekistan: Islam, Modernity, and Unveiling under Communism*. Seattle and London: University of Washington Press.
- 磯貝真澄 2014「ヴォルガ・ウラル地域のテュルク系ムスリム知識人と女性の啓蒙・教育」、橋本伸也編『ロシア帝国の民族知識人——大学・学知・ネットワーク——』昭和堂、156-177頁。

(東北大学東北アジア研究センター)